

延暦寺発掘調査報告書 I

1980

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

序

京と近江の国境につらなる比叡山に所在する延暦寺は、平安時代以来今日まで日本の歴史、宗教、文化などに大きな影響をおよぼしてきた。

本書は、史跡延暦寺境内地内の現状変更に伴う発掘調査の報告です。調査面積は、東塔、横川両遺跡とも小規模ではあるが、織田信長による元亀二年の焼打ち以前の延暦寺の姿をかいまみることができ、今後の研究上、極めて重要な成果と思われる。

ここにその結果をとりまとめ、参考に供したい。

昭和 55 年 3 月

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課長

沢 悠 光

例　　言

1. 本書は、史跡延暦寺境内の現状変更申請に伴い実施した東塔遺跡（延暦寺事務所敷地内）、横川遺跡（行院敷地内）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会が財団法人滋賀県文化財保護協会、延暦寺の協力を得て実施した。
3. 発掘調査および整理・報告書の作成は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明が担当した。
4. 調査・整理にあたっては、奥野宗寛、山口順子、折井千枝子、坂井秀弥、柏田三枝子の諸氏をはじめ、延暦寺管理部の協力を得た。また、横川遺跡の調査については、大津市文化財専門委員西田弘氏より種々の援助をうけた。記して厚く感謝の意を表するものである。
5. 本書は、調査担当者兼康保明が執筆したが、横川遺跡については、昭和40年の調査報告を、調査者西田弘氏の承諾を得て収録した。

目 次

序

例 言

東塔遺跡発掘調査報告 1

1. 調査の経過
2. 調査の所見
3. 出土遺物
4. 小 結

横川遺跡発掘調査報告 1 0

I 昭和40年の調査 1 0

1. 調査の経過
2. 調査の所見

II 昭和54年の調査 1 2

1. 調査の経過
2. 調査の所見
3. 出土遺物
4. 小 結

図 版 目 次

1. 遺跡位置図
2. 東塔遺跡、調査地全景（西より）・第5トレンチ（西より）
3. 東塔遺跡、第1トレンチ（西より）・第4トレンチ（北より）
4. 東塔遺跡、第2トレンチ（北より）・第3トレンチ（北より）
5. 東塔遺跡、遺物
6. 東塔遺跡、遺物
7. 東塔遺跡、遺物
8. 横川遺跡、調査地全景（西より）・第5トレンチ（南より）
9. 横川遺跡、第3トレンチ（南より）・第1トレンチ（南より）

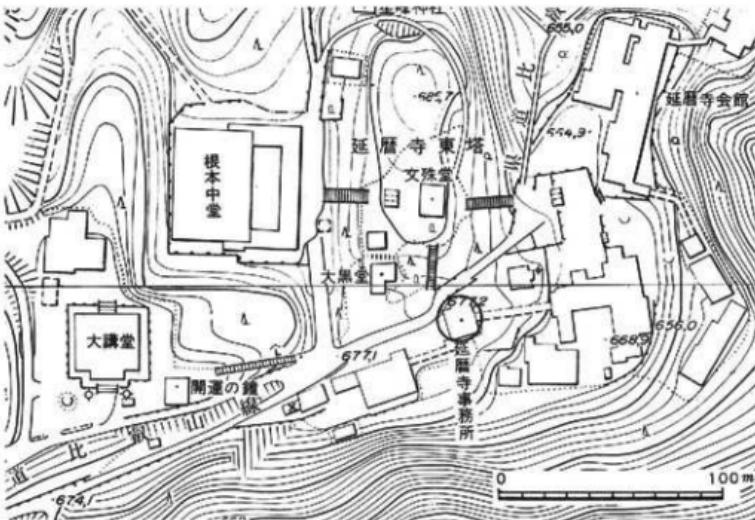
東塔遺跡発掘調査報告

1. 調査の経過

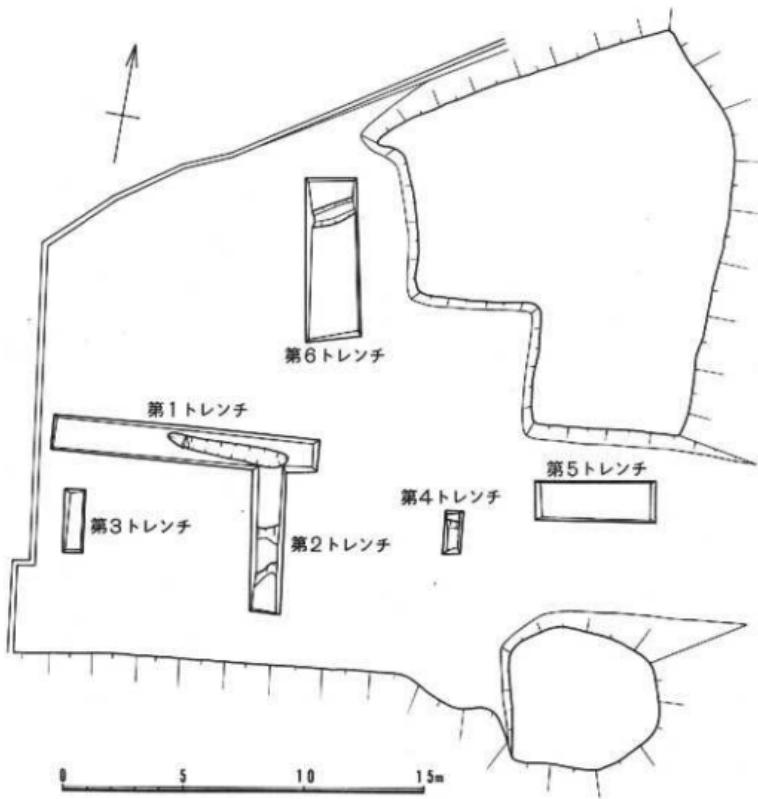
調査は延暦寺の東塔に所在する、大正12年に建築された事務所の改築に伴い実施したものである。

事務所の位置は、東塔の伽藍のうち最も東にある文殊堂より南約60mの距離にある。この場所については、記録や絵図等に遺構の存在を明示するものではなく、これまでから特に問題にされるような場所ではなかった。現在、事務所の周辺には、隣接して執行局、和労堂、売店、警備詰所等の建物がならび、比叡山のメインストリートとも言うべき場所で、そのため道路も舗装して整備されており、山中の各所に見られる建物跡の平坦地のイメージは全く無い。さらに、文殊堂南側の崖面や、それに続く書院への道に見られる切り通しの断面には地山の露頭が認められ、事務所のある地点における遺構の存在の可能性については否定的であった。

しかし、事務所の木造建物を取壊して後、現地立合い調査を実施したところ、敷地内の地表で数片の土師器片が採集された。このことから、事務所建設の際か、あるいは

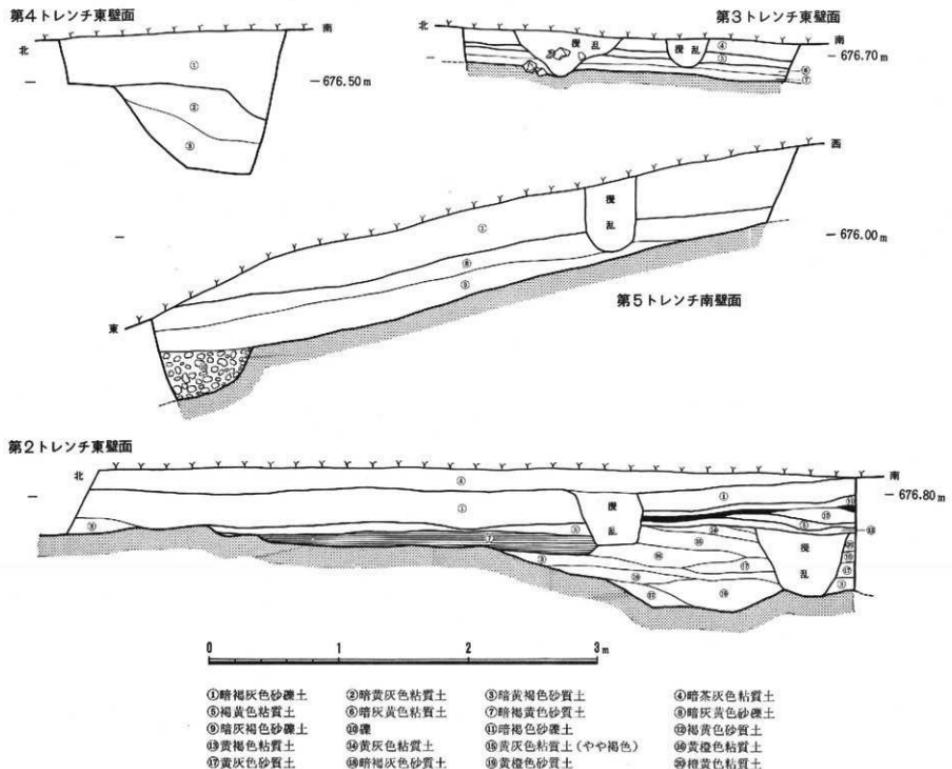


第1図 調査地点位置図



第2図 東塔遺跡トレンチ配置図

はそれ以前に旧地形が削平され、現在の状況に改変された可能性があり、当初から事務所の敷地内全域が地山の露頭であるとする考え方は、再検討せざるをえなくなった。一方、この調査に先立って同じ東塔遺跡内で行った、法華總持院跡の発掘調査も同様な立地条件であった。ここでは、急傾斜の谷に面した場所においても、巧みに造成がされ、十分遺構の存在する可能性があることを学んだところである。こうしたいくつかの問題点を解決するため、工事に先立って敷地内を発掘調査し、遺構が存在するのか、あるいは何らかの遺物包含層があるのか、それとも全面地山であるのかを確認することとなった。



第3図 東塔遺跡トレンチ断面図

発掘調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、昭和15年6月12日から24日まで実施し、期間中測量に際しては、奥野宗寛、山口順子、折井千枝子、柏田三枝子の諸氏の協力を得た。

2. 調査の所見

調査は、まず包含層の有無を確認するため、事務所敷地内の四方にトレンチを設けた（第1、2、5、6トレンチ）。その結果、第2トレンチで遺物が出土し、また包含層の存在が明確になった。そのため、包含層の広がりが予想される敷地内の南側の部分に、便道等の障害物をさけて小トレンチを確認のため2カ所（第3、4トレンチ）設けた。各トレンチの調査所見は、次のとおりである（第2、3図）。

第1トレンチ 地表面から約20～30cm程で地山（岩盤）となる。遺物を包含する層は認められなかった。

第2トレンチ トレンチ内で検出された地山面は、北側では地表下約50～60cm程であらわれ、南にむかって緩やかに傾斜して行き、トレンチの南端部では地表下約100～110cm程で地山となる。

遺物包含層は、南北方向に設けたトレンチの中ほどから南側に広がり、地表下約30～40cmでその上面に到達する。包含層は、地山の傾斜した落込み部分の堆積に認められ、わずかに南に傾斜するといふもののはば水平な、幾層にもわたる幅の薄い土層から形成されている。この層中には、炭層や炭化物を多く含む層も認められる。また、包含層中にピット状のものが認められたが、ピット内の土が周囲の土にくらべて異様に柔らかく、さらにピット中央部に腐蝕によると思われる新しい汚れがあることなどから、木の根か、あるいは斜めに深く打ち込まれた杭等の痕跡かと考えられる。

第3トレンチ 地表面より約25cm程で地山となる。地山は、南へ約5°程の緩やかな勾配で下って行く。第1層の暗茶灰色粘質土を除去すると遺物包含層となり、第2トレンチで観察されたのと同様な、層の幅の薄いほぼ水平に近い堆積層となる。この層は3層からなり、上層に見られる褐黄色粘質土は、やはり第2トレンチの包含層の上部において認められる。

第4トレンチ 地表面より深いところでは約100cm、浅いところでは約35cm程で地山となる。第1層の暗褐色砂礫土を除去すると、暗黄灰色粘質土と暗黄褐色粘質

土からなる包含層となり、この層が地山の上に堆積する。しかし、層の堆積状況は第2、3トレンチとは異なり、地山の傾斜に沿った堆積を示している。

第5トレンチ このトレンチは、事務所から書院にむかって下って行く斜面地に設けた。土層は、表土と地山の崩れた土の堆積のみで、第2～4トレンチで見られたような遺物包含層は認められなかった。ただし、地山の崩れ土からなる層中より、少量ではあるが土器片が出土した。

第6トレンチ 地山であった。

3. 出土遺物

遺物は、第2～5トレンチから出土したものと、事務所敷地内で表面採集したものである。これらは、各々の出土状況から類堆して、第2トレンチの包含層に代表される堆積層の遺物が、層中より流出したか、あるいは攪乱をうけて表面にあらわれたものと考えられ、それでもとは同一層中の遺物であったと理解してよいであろう。

出土遺物は、土師器の皿が一番多く、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器などがあるが、総じて小破片であり図化できるものは少ない。

土師器 皿と椀があり、皿は法量から見て大小2種、形態の特長から3種に分類できる。

皿A (a～c) 口縁部は屈曲して外反し、端部が嘴状に内側に鋭く巻き込む。器壁は数mm程で薄く、つくりはシャープである。小破片のみで法量の復原は困難であるが、東塔遺跡の大講堂、法華總持院跡の調査では大小2種の皿が認められる。

なお、口縁部から底部にかけての内面に、「大」の墨書きの認められるもの(c)がある。

皿B (1～6) 口縁端部を丸く内方へ巻き込むが、形態の特徴は皿Aに類似する。しかし、皿Aにくらべると器壁は厚くなり、口縁端部も含めて全体的にシャープさがなくなる。出土量は、土師器の中で最も多い。

皿C (7) 口縁部は外反し、口縁端部にわずかにヨコナデ時に生じた稜がつくが、皿A、Bにくらべると單純で特色はない。器壁も皿Bと同様、Aよりも厚手である。小破片が1点出土したのみで、復原すれば大皿になるものと推定される。

椀 (8、9、d) 口縁部は外方へ開き、器体は逆梯形をなすものと推定される。

底部は欠失するが、おそらく高台がつくものと思われる。

黒色土器 黒色土器A類とB類の椀が、小破片ではあるが数点出土した。

椀A (10) 体部はやや内輪気味に伸び上がり、口縁部の内面に一条の浅い沈線がめぐり段状になる。内面にヘラミガキが施される。

椀B (e, f) 口縁部(e)と胴部(f)の小破片がある。口縁部は内面に一条の沈線がめぐる。ヘラミガキは、内・外表面ともに施される。

緑釉陶器 (g~k) いずれも小破片であるが、器形は椀と推定される。胎土・色調等から見て、何箇所かの異った窯の製品と考えられる。

灰釉陶器 (11, l~n) 壺の底部と、器形の判らない小破片がある。

壺 (11) 高台のついた底部で、胴部の外面にはカキ目が残る(黒笹90号窯式)。

須恵器 鉢、椀、壺、坏蓋(?)等があるが、いずれも小破片で出土量もわずかである(o~t)。

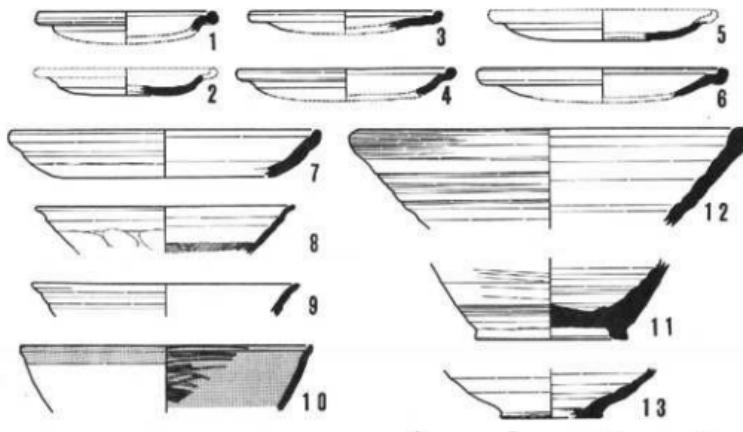
鉢 (12, r) 口縁部が丸くふくらんだ特徴ある形態を示す。口縁部外面のみ、黒化する。

また、別な器形の須恵器の割れ口を平滑に加工して、鉢として再利用したと思われるものがある(s)。

椀 (13) 底部は平底で、糸切り痕を残す、つく



第4図 須恵器格子叩(実大)



第5図 東塔遺跡出土土器実測図

0 5 10 15cm

り、胎土の粗い須恵器である。

甕 (t) 小さな格子叩きを施した甕の胸部の小破片で、器壁の厚さは8mm。他の須恵器にくらべて、色調が黄褐色がかり異なる（第4図）。

壺蓋 (o) 天井部の破片であるが、つまみは無いようである。

青磁 (u) 淡いオリーブグリーンの色調をした楕の小破片が1点ある。混入の可能性が強い。

(土器の年代観) 土器はその型式から見て、大きく10世紀代に属するものと11世紀代の二時期に分けられよう。10世紀代の土器としては、土師器皿A、黒色土器椀A、須恵器鉢（12）などがあげられよう。それに対して11世紀代の土器は、土師器皿B、須恵器椀などがあげられる。

4. 小 結

(包含層の性格) 包含層の堆積状況は、傾斜地の高い部分から遺物と土砂が流れて自然に堆積したものではなく、第2トレーナーの断面図によても判るように、幾層もの幅の薄い土層がほぼ水平に積み重なった入為的なものである。同様な土層の状況は、東塔遺跡の大講堂の建つ平坦地、法華経持院跡の南斜面などでも認められている。こうした水平堆積の土層は、これまでの調査結果から考えて、建物の新築あるいは増改築に伴って敷地を拡張する必要が生じた時の、造成による盛土と理解している。斜面の多い山中であるだけに、天然の平坦地を伽藍配置に合せて確保することは難しく、したがって斜面地の一部や谷を埋立て人工的に平坦地を造成して行ったのであろう。そのためには、かつて建物のあった平坦地もならされて、新たな平坦地確保のため埋土に利用されている。ことに火災後の建物の建替の場合にこうしたことが行われたようで、同時に火事場の清掃をも兼ねて削りとて埋立てに利用しているようである。このことは、埋立ての盛土中に炭や焼土が諸所に認められることや、また延暦寺の主要建物である大講堂や法華経持院が記録にみられる建てかえ回数にくらべて、遺構の重複数が少ないことからも容易に推定できる。

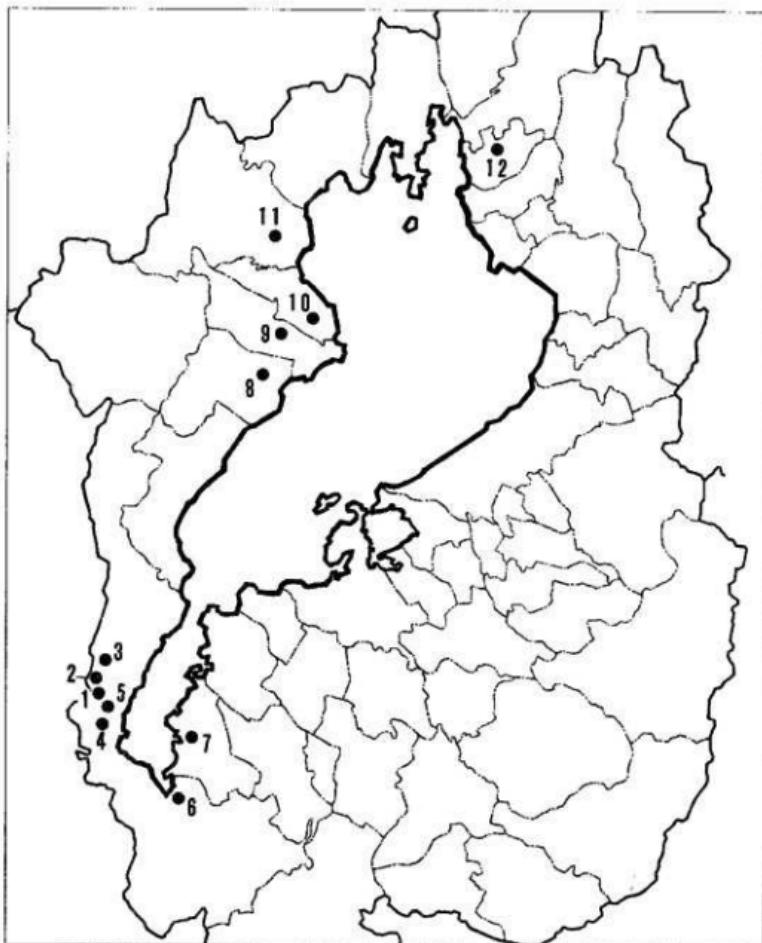
さて今回の調査地点については、造成の埋土の検出された位置から見て、文殊棲のある台地をさらに南へ、つまり谷の傾斜面いっぱいまで拡張する必要があって造成がなされたのであろうと考えられる。また、この平坦地の拡張を示す埋立ては、第5ト

レンチを入れた東側斜面では認められることから、南側にのみ行われ、ちょうど根本中堂正面を窓ぐのような形になる。この台地は、東坂本から比叡山に登る本坂とよばれる主要な道の終点にもあたり、単なる根本中堂正面の伽藍というだけではなく叡山を守る防禦線の役割をもつたものである。埋立ての水平堆積層中の遺物で最も新しい土器が11世紀後半に位置づけられることは、東塔という比叡山の中心的な場所柄を考慮すれば、埋土中の最も新しい土器の時期以降の早い時期に造成がなされたと考えることもできる。同じ11世紀後半の時代は、数十年にわたってくりかえされた山門と寺門の争乱が続いており、当該地の造成も単に建物の増改築だけではなく、防衛の機能をも配慮した造成であったかもしれない。

(土師器皿Bをめぐって) 出土遺物のうち、11世紀代の土器として比較的出土量の多い、(と言っても小破片であるが) 口縁端を丸く内側に巻込んだ土師器の小皿について、近江での盛行年代を検討してみたい。

土師器皿Bは、その形態から見て皿Aの系譜にあることは言うまでもなかろう。皿Bは皿Aにくらべ、器体のシャープさが消え、器壁が厚くなり、法量も異なる。この特徴的な皿Bは、畿内では早くからその年代観が検討されており、奈良市の興福寺食堂の調査で永承4年(1049)の焼面から検出されたことから、その年代観の一点を11世紀中葉に求めてきた。^①また、編年の整備された瓦器椀との共伴関係についても、白石編年I期のものに伴うことから11世紀中～後半を中心とした小皿の形態であることはまちがいない。こうした畿内で一般的に見られる土師器の小皿が、近江でどのような位置を占めるかについてはこれまで検討されたことはない。それは、平安時代中～後期の遺跡の調査例が少なかったことにもよるが、現在報告されている中から見ても次のような分布が認められる(第6図参照)。出土の分布は、県下の各地に広範囲にわたって認められるが、遺跡によっては全体に占める割合がきわめて少ないところもあり、湖東地区のように報告例が少ないためはたして分布しないのか、未調査のため判らないのか今一つ状況のつかみがたい地域もある。ただ延暦寺においては、採集品からみれば東塔、西塔、横川の各遺跡から、ほぼ普遍的に出土している。

近江における皿Bの年代観について、各地の遺跡での伴出遺物から考えてみよう。例えば、延暦寺と距離的に近い大津市皇子が丘1丁目では、皿Bに11世紀中葉に考えられる近江産の綠釉陶器の小椀が共伴する良好な包含層がある。また、高島郡新旭町



- ① 大津市東塔遺跡 ② 大津市西塔遺跡 ③ 大津市横川遺跡 ④ 大津市皇子が丘遺跡（『大津市文化財調査報告書6』） ⑤ 大津市南淡賀町廢寺跡（『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度） ⑥ 大津市近江四術跡（『滋賀県文化財調査報告書』第6冊） ⑦ 大津市志那中遺跡（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』V） ⑧ 高島町鳴遺跡 ⑨ 安曇川町上小賀遺跡（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』VI-1） ⑩ 新旭町堀川遺跡（『滋賀県文化財調査報告』第5冊） ⑪ 今津町弘川遺跡 ⑫ 高月町井ノ口遺跡（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-2）

第6図 土師器皿Bの分布

堀川遺跡の石組み造構からの一括出土品では、皿Bと共に寛治5年(1091)の墨書銘をもつ平安京出土々器と同型式の須恵器の鉢が出土している。さらに最近の資料では、高島郡今津町弘川遺跡で、土坑内から折戸53号窯式の灰釉陶器と共に出土し、同時に出土した白磁には堀川遺跡の石組み造構出土例と同型式のものも含まれていた。^④こうしたことから見ても、皿Bの盛行年代は概ね11世紀中～後半にあたり、畿内と同様な時期の所産と考えてよいのではないだろうか。

最後に、11世紀中～後半にこうした皿Bがはたして近江の大半の地域で、普遍的に用いられたものであったかどうかについては疑問がある。というのは、同じ高島郡内にあっても高島町中ノ坊遺跡のように、折戸53号窯式の灰釉陶器を多く出土し、同時期と考えられる近江産をはじめとする縁釉陶器などを伴出しながら、一点も皿Bを含まない遺跡が存在することである。中ノ坊遺跡では皿Bに代る土師器として、地方色の濃い糸切り底の土師器が考えられる。^⑤こうしたことは、すでに皿Bの分布でもふれたように、出土量の僅少な遺跡とも関連しよう。ただ現時点では、そうした皿Bの有無が何を意味するのか考へるには、いささか資料不足の感がある。しかし、今後11世紀の遺跡を考える時、皿Bをその特徴的な形態より年代判定の資料としてみるだけではなく、出土した遺跡の歴史的な背景と共に考へて行かねばなるまい。ここでは、今後の課題として、問題を提起するにとどめる。

註

- ① 塚井清足・鈴木嘉吉『興福寺食堂発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第7冊 奈良国立文化財研究所 昭和34年)
- ② 松浦俊和『大津宮周連遺跡(皇子が丘地域)』(大津市文化財調査報告書6 大津市教育委員会 昭和51年)
- ③ 『新旭町堀川遺跡第2次発掘調査略報』(新旭町教育委員会 昭和51年)
- ④ 昭和55年7月 滋賀県教育委員会調査。
- ⑤ 萩康保明「高島町中ノ坊遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』V 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和53年)

横川遺跡発掘調査報告

I. 昭和40年の調査

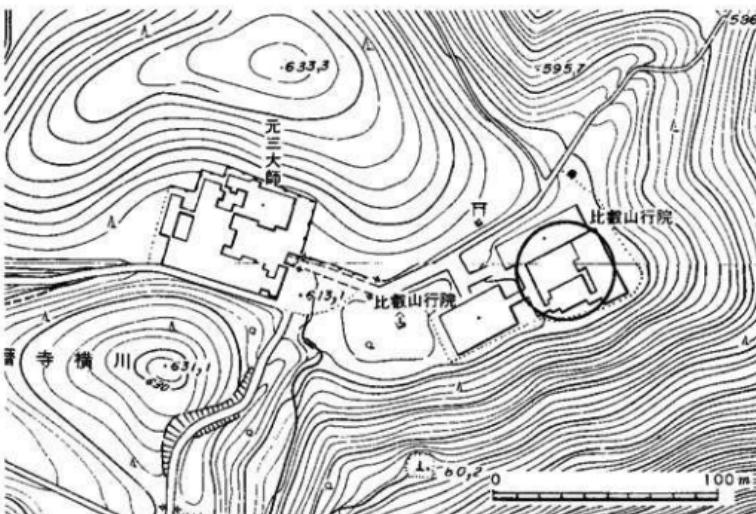
1. 調査の経過

昭和40年7月27日より調査を開始する。

7月27日 調査予定地の中央部に、トレンチを設定する。同トレンチの北端付近に於て、地山が北に傾斜し、その傾斜面を割石で保護していると推測される状況が検出されたので、一応この状況の連続を確かめるため、西方に石の列を追う。午後4時頃激しい雷雨のため作業中止。（人夫3名）

7月28日 前日の雷雨のため、発掘部分に雨水がたまつたので、排水を兼ねて第1トレンチを延長すると共に、前日検出した石の列を東に向かって発掘を進めたところ、間もなく石の列が途切れ、南に向かって広く地山が落ち込んでいる部分があらわれ、この部分には樹根などがはびこっていた。（人夫3名）

7月29日 前日に続き東に傾斜面を追うと共に、南に入りこんだ部分の発掘を進め



第7図 調査地点位置図

た結果、この部分には何ら遺構らしいものは発見出来ず、樹根等による搅乱であると推測された。発掘の進展にともない、更に排水溝を一ヵ所作る。（人夫3名）

建設地の西北隅に土器の破片の多数散乱している箇所があるため、その土器の採集を始める。（アルバイト生1名）

7月30日 この地山の傾斜面は、旧堂舎敷地の北限と推測され、傾斜面の石の列は上止めのためと思われる。本日一応この石の列の検出を終り、発掘箇所の整備を行なう。（人夫3名）

前日に引き続き、土器の採集を行なう。（アルバイト生3名）

7月31日 発掘地の整備終了。本日で作業終る。（人夫3名）

土器の採集も終了。採集土器を宮林課へ運ぶ。（アルバイト生2名）

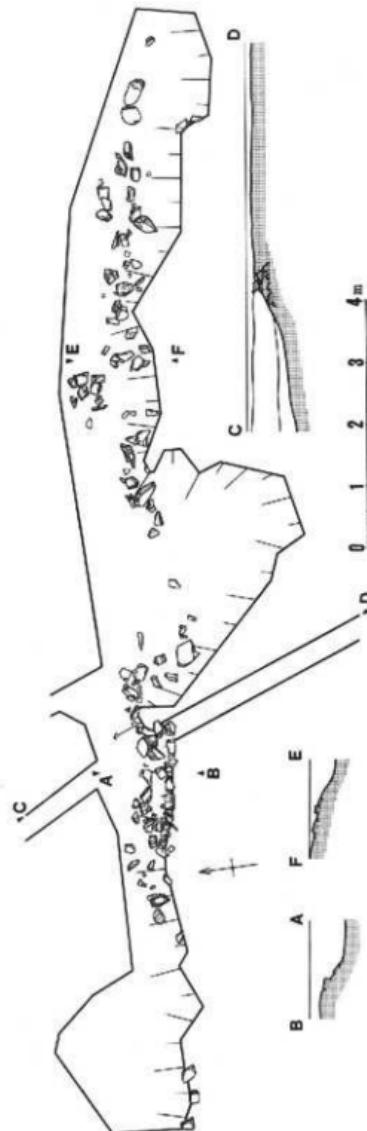
8月1日 採集土器を洗い整理する。（アルバイト生3名）

トレチの実測を行なう。

8月2日 資料写真の撮影を行なう。トレチ断面図作製のために残していた部分の発掘を行なう。（アルバイト生3名）

8月3日 作業中止。

8月4日 発掘地全域の平板測量を行なう。更に発掘箇所の実測に対する準備を行なう。（アルバイト生3名）



第8図 横川遺跡遺構実測図(昭和40年調査)

8月5、6、7日 発掘部分の実測を行なう。

2. 調査の所見

調査の経過で明らかにされた如く、今回の調査の結果明らかにされた遺構は、旧堂舎の敷地の北限と思われる部分の土止めのためのもので、その仕事は極めて簡単なものであり、しかも廃絶後の長い年月の間に多く崩壊し、その一部が残存している状況に過ぎない。この敷地の北側に、東に向かって傾斜する谷があり、この谷は西端付近に於ては、ほとんど敷地と同じ高さであるが、東に進むに従い相当の高低差をもっている。このため、おそらく土砂の流下を防ぐために簡単な土止めのための仕事が行なわれたものと思われる。堂舎の遺構は、トレンチの側面図（第8図）でも明らかなように、すべて地山かある程度削られているため全然不明である。また、現在までの知見では、文献その他に於ても堂舎の名称や規模などを知る手掛りは得られなかった。

出土遺物については、調査の経過で説明したように相当量の土器片が採集されたが、その大部分は素焼きの小皿である。中に施釉の陶器片が數片発見されたが、ほとんど綠釉である。また、半瓦破片1個が宮林課員により採集されたが、この地の堂舎がかつて瓦で葺いていたとは考えられない。

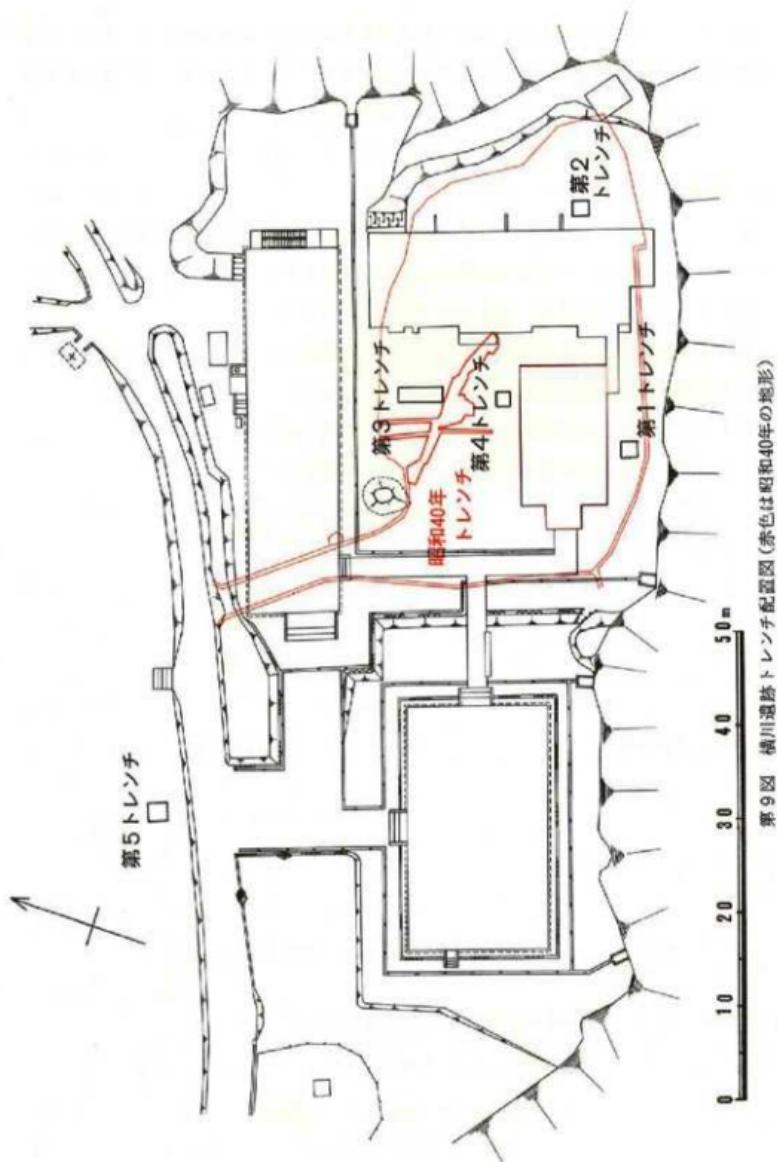
II. 昭和54年の調査

1. 調査の経過

調査は延暦寺の横川に所在する、行院の木造建物2棟の改築に伴い実施したものである。

当地は、すでに行院の建設に伴い昭和40年に発掘調査が行なわれており、また從来からある建物を解体し、その後に新しい建物を建てるため特に問題はなかった。しかし、行院の中庭を中心に、広範囲にわたって土器の散布が認められることから、昭和40年の調査で明らかにされた遺構、遺物包含層の遺存状況を把握することを目的として発掘調査を行なうことになった。

発掘調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、昭和54年5月29日から6月4日まで実施した。調査にあたっては、山口順子、坂井秀弥両氏



第9図 横川遺跡 レンチ配置図(赤色は昭和40年の地形)

の協力を得たほか、昭和40年の調査を担当された西田弘氏に現地の立会いを頼い検討を行なった。その結果、今回の発掘調査の結果が前回にくらべて大きな相違もなく、とりわけ問題もないことから、その時点で調査を終了した。

2. 調査の所見

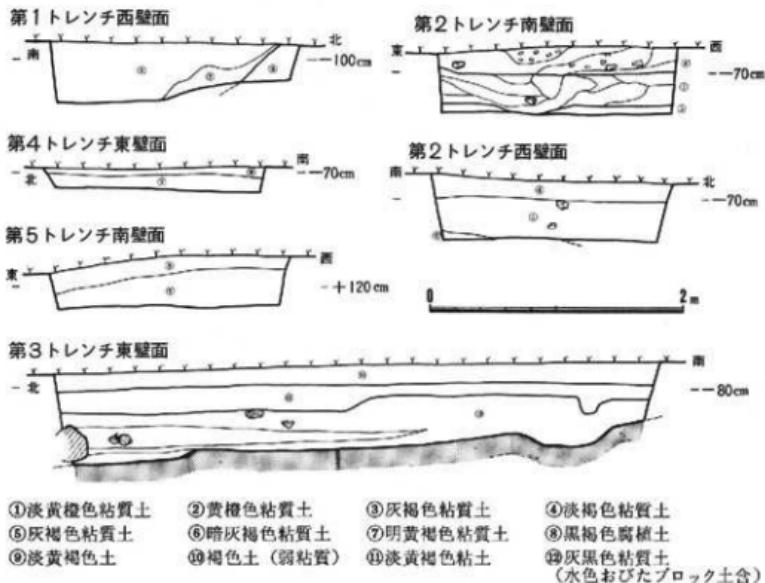
調査は、行院の木造建物の周間に4カ所と、行院の北側——道路をはさんだ山裾に1カ所、計5カ所のトレンチを発掘した(第9図)。

各トレンチの調査所見は、次のとおりである(第10図)。

第1トレンチ 地山の橙色の粘土層が露頭しており、部分的に色調と固さの異なる粘土層がブロックで層を形成している。

第2トレンチ 地表面から地山(粘土層)までの堆積を2層に大別できる。

上層は約20cm程の淡褐色粘質土で、土師器の風化した小破片をわずかに含む。上層



第10図 横川遺跡トレンチ断面図

をさらに細かく分層してみると、各層の堆積は不自然で、一度動かされた土である可能性が強い。同様に下層も、地山と同質の粘質土ではあるが、細い分層結果や、地山の粘土層中には礫を含んでいないにもかかわらず下層中には混っていることなどから見て、上層と同様、やはり動いた土と考えるべきであろう。

第3トレント 地表面から地山までに、大きく3層の堆積がある。

第1層 約15cm程の現代の瓦やゴミ類を含む層。

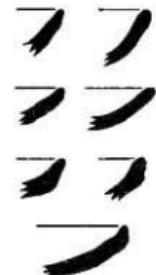
第2層 約10~20cm程の淡黄褐色粘質土で土師器の小破片を含むが、土の汚れは新しい。

第3層 約20~40cm程の灰黒色粘質土で、青白色をおびた粘土のブロックを含むほか、トレントの北側で粘性の強い、腐敗しかけた木などを含んだ層が分層できる。下層は地山直上で若干土器片を検出したが、全体に悪臭を放つ腐敗した自然木を含むことから、一度動かされた土である公算が強い。

第4層 地山は、昭和40年の調査で確認されたのと同様、緩やかに北側に傾斜して行く。

第4トレント 第3トレントで認められたと同じ瓦やゴミ類を含む層があり、それを除去すると暗黄褐色粘土の地山があらわれる。また、ボーリングステッキによれば約1.5m程で岩盤かと推定される固い面に達する。

第5トレント 約15cm程の表土を除去すると、角礫が多く含む淡黄褐色土となる。この土は、付近の崖面に露頭する地山の山土であり、この層の上面が緩やかに南東側
— 行院の方向に傾斜する。



3. 出土遺物

遺物は、第2、3トレントで出土したものと、第3トレント付近の中庭で表面採集したものであるが、ほとんどが小破片である。

出土遺物は、土師器の皿の破片が大半を占め、他に縁釉陶器、須恵器、瓦がごく少量出土している。

土師器 実測図 皿の小破片のみで、概ね大皿と小皿の2種類に大別できる。形態と手法は、口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、

口縁部内外面にヨコナデを施す単純な器形の皿である。トレンチ内から出土するものも、地表に散布する表面採集品も、形態、胎土、色調等全く同じである（第11図）。

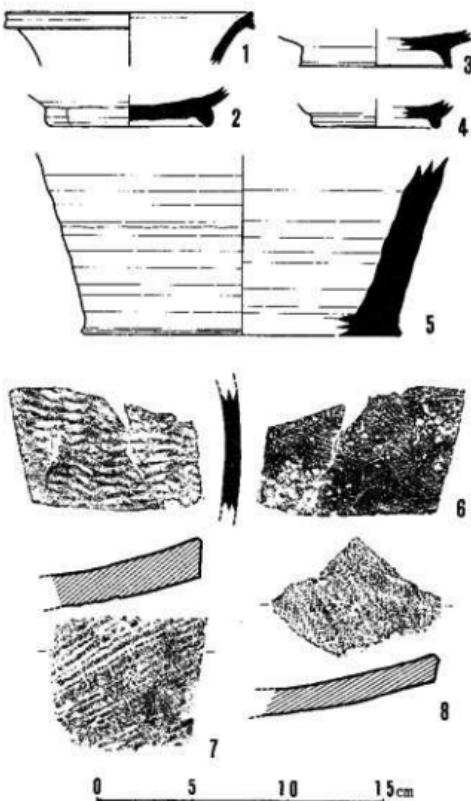
昭和40年の調査時に出土した「蒸焼きの小皿」とは、この皿をさすものと思われる。

灰釉陶器 広口瓶の口縁部（1）と、椀の底部（2）および小破片がある。底部外面には、施釉がみられず、器体上部に釉をつけかけしたものであろう。

綠釉陶器 椭の底部が3点あり、そのうち図示できなかった小破片が、第3トレンチ下層から出土した。（3）は高いシャープな輪高台が、また（4）は、底部内面に一条の沈線が廻るなど特徴がある。

須恵器 灰白色をしたやや軟質の、底部不調整の鉢の底部（5）が採集されたほか、第3トレンチより壺の胸部の破片（6）が1点出土している。壺の整形は、外面に平行叩きを施した後、器面を平滑に調整している。また、内面の静海波文は、通例のものにくらべて異質である。

瓦 平瓦の小破片が3点地表で採集されている。表面のあらい整形で、凸面には繩目、凹面には布目を残す（7、8）。



第12図 横川遺跡出土遺物実測図・拓影

4. 小 結

今回の調査結果から、昭和40年の調査で確認された包含層や遺構は、第3トレントの状況が示すように、行院の建設工事によって削半あるいは擾乱されていた。したがって、遺構については新たな知見を得ることはなかったが、擾乱されて再堆積した層中、あるいは地表に露頭し採集された遺物から、昭和40年に検出された包含層の様相をある程度推測することができる。

(土器の年代観) 今回出土あるいは採集された土器が、かっての包含層の遺物と考えるのは、土器の大半が土師器の小皿で占められ、それ以外に若干の灰釉陶器、綠釉陶器、須恵器などが混る様相が、昭和40年の調査における遺物の出土状況とよく合致しているからである。

土器は、これまでの延暦寺あるいは同様な県下の諸例から見て、ほぼ二つの時期に大別できる。

一つは、出土量の最も多い土師器の小皿で、口縁部をヨコナデ整形しただけの単純な器形ばかりであることから、概ね12~13世紀の所産と推定される。もちろんこの形態の小皿は11世紀後半にも認められるが、同時に東塔遺跡で出土しているような、口縁端部を丸く内側に巻き込んだ「皿B」を共伴しており、全体に占める割合は「皿B」の方が大きい。横川遺跡の場合、口縁端部を巻き込んだ小皿は皆無であることから、11世紀後半にまで遡ることはあるまい。横川遺跡で出土しているような、口縁部に特徴のない小皿についても、時期によって法量に変化が認められることは、すでに高島郡高島町中ノ坊遺跡^①で検証した。しかし、本資料の場合、全て小破片であるため正確な法量復原が難しく、詳細な時期を求める決め手を欠くことから、漠然と12~13世紀と考えざるをえないのである。

もう一つは、出土量の少ない灰釉陶器、綠釉陶器、須恵器などである。中でも窯によってその編年が明らかになっている灰釉陶器について見るなら折戸53号窯式のもので、先に見た土師器の小皿より古い11世紀後半に位置づけられる。綠釉陶器についても、東塔遺跡法華経持院跡の10世紀の整地層中のものより後出的で、11世紀のものであろう。高台の低い内底面に沈線の廻る綠釉陶器(4)などは、野洲郡野洲町久野部遺跡では12世紀前半と考えられている近江型黒色土器や土師器などに混って1点だけ出土しており、ほぼ使用の下限が明らかになっている。須恵器にしても、鉢の形態や

焼成など中世須恵器的であり、また甕の叩きにしても奈良・平安時代前期のものと比較すると異質なもので、類似した叩きは中ノ坊遺跡などで見られ、やはり11世紀代に考えられている。こうした比較から、灰釉陶器、綠釉陶器、須恵器は同時期に共存していた可能性が多分に認められる。あえて年代を与えるなら、11世紀後半の遺物としてとらえてよいであろう。

(瓦出土の問題点) 昭和40年の調査に引き続いて、今回の調査でも小破片ではあるが瓦が採集されたことは、延暦寺の初期の建物を考えるうえで重要な役割をはたすものといえよう。それは、比叡山にある延暦寺の諸堂は、寒冷多湿という自然条件から、屋根は桧皮葺きと考えられており、瓦葺きの建物が存在した可能性について本格的に論じられたことはなかった。しかし、東塔遺跡、西塔遺跡では、これまでにも平安時代前期の瓦が採集、あるいは発掘調査によって出土することが知られていた。昭和53年に東塔遺跡法華経持院跡の発掘調査を行ったところ、10世紀の整地層中から軒丸瓦を含むかなりの量の瓦が出土し、整地以前の建物が瓦葺きであった可能性が強くなってきた。この事実と、比叡山各所からの瓦の出土を考え合せると、延暦寺の初期の建物は、瓦葺きかあるいは一部瓦を使用した建物ではないかと推定されるのである。横川遺跡についても、出土状況はけっして良好な資料とは言い難いが、他所から運ばれたものではなく、包含層中より出土したものであるとすれば、東塔遺跡や西塔遺跡同様に横川遺跡の初期の建物には瓦が使用されていた可能性がある。この点については、今後横川遺跡で発掘調査を行う際留意すべきであり、その結果により明確なものになろう。ここでは、問題提起にとどめたい。

註

① 田中勝弘「高月町井ノ口遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-II 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和52年)

② 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』V 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和53年)

③ 大橋信弥・別所健二・谷口徹『久野部遺跡発掘調査報告書——七ノ坪地区——』(滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和52年)

ただし最近の湖西地方における知見では、本遺跡の近江型黒色土器の編年が若干古くなりうことや、土師器の皿が畿内のものにくらべて、細部の整形に地方色のあることや、さらに他の伴出遺物からみて11世紀末まで遡りうる可能性もある。

④ 註③に同じ。

⑤ 服部清道「法華経持院跡と遺瓦」(『史迹と美術』301 史迹美術同好会 昭和35年)

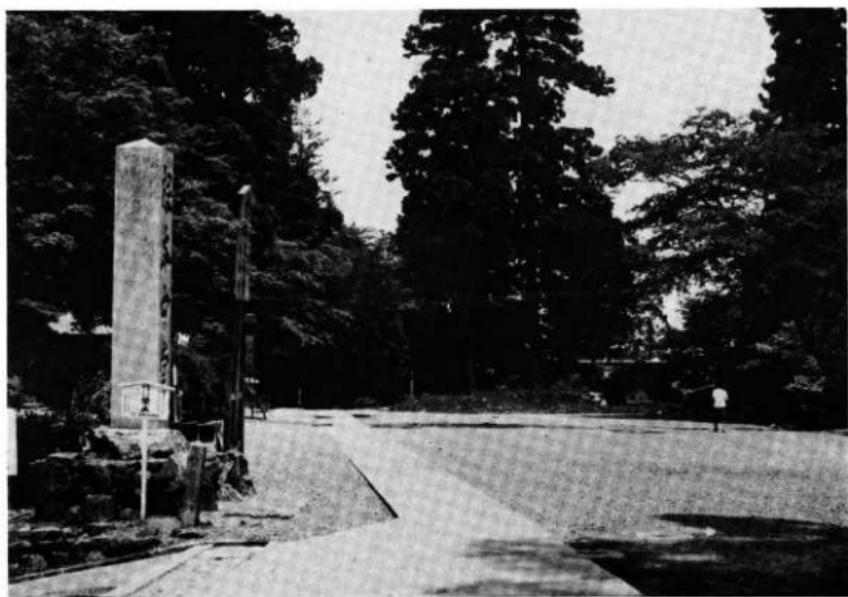
西川幸治・大沼芳則・西田弘『滋賀県指定文化財延暦寺大講堂(山讚仏堂)移築工事報告』(滋賀県教育委員会・比叡山延暦寺 昭和38年)

⑥ 水野正好「延暦寺西塔堂坊跡群の発掘調査」(『仏教芸術』61 毎日新聞社 昭和41年)

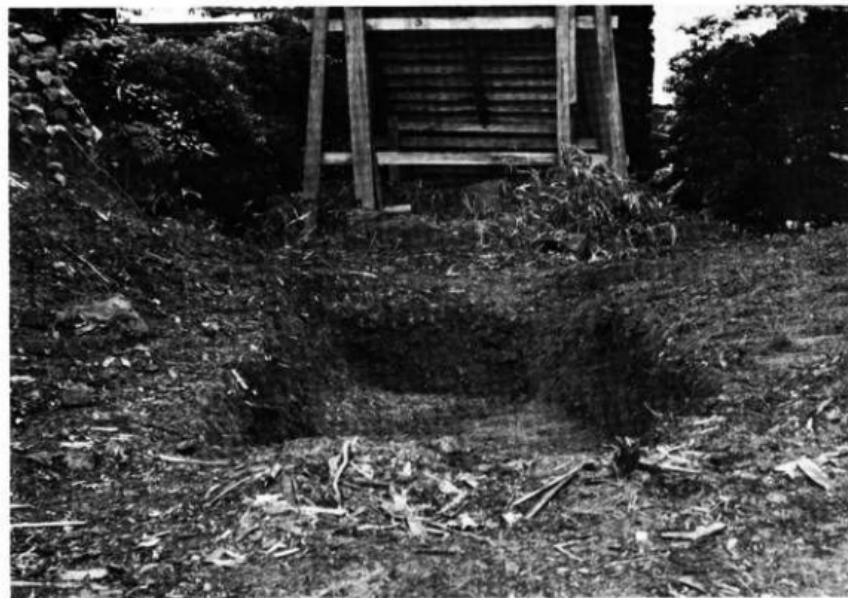
図 版

図版
一
遺跡位置図





調査地全景（西より）



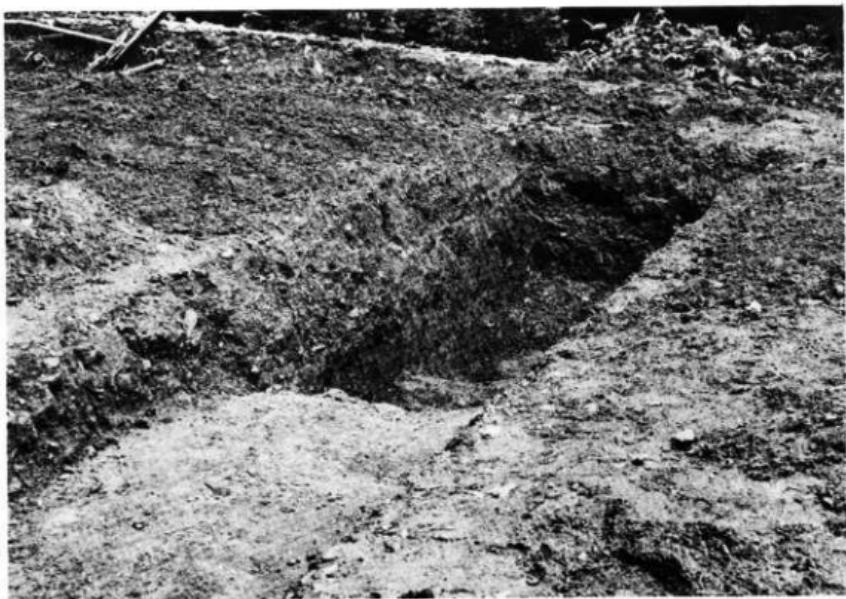
第5 トレンチ（西より）



第1トレンチ（西より）



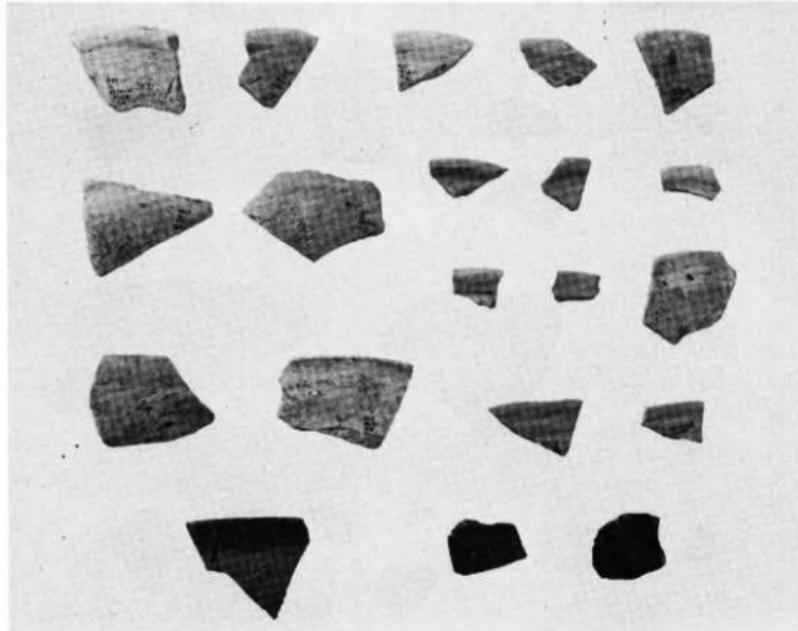
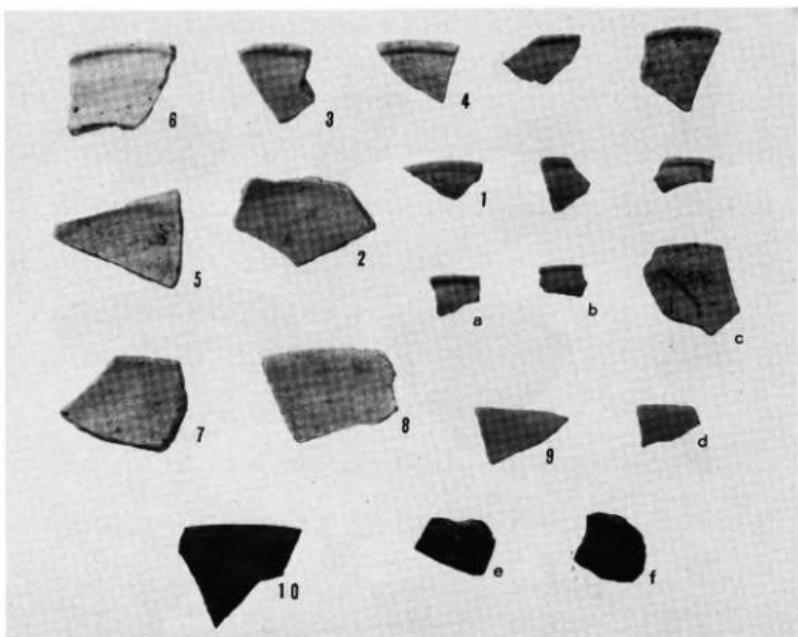
第4トレンチ（北より）

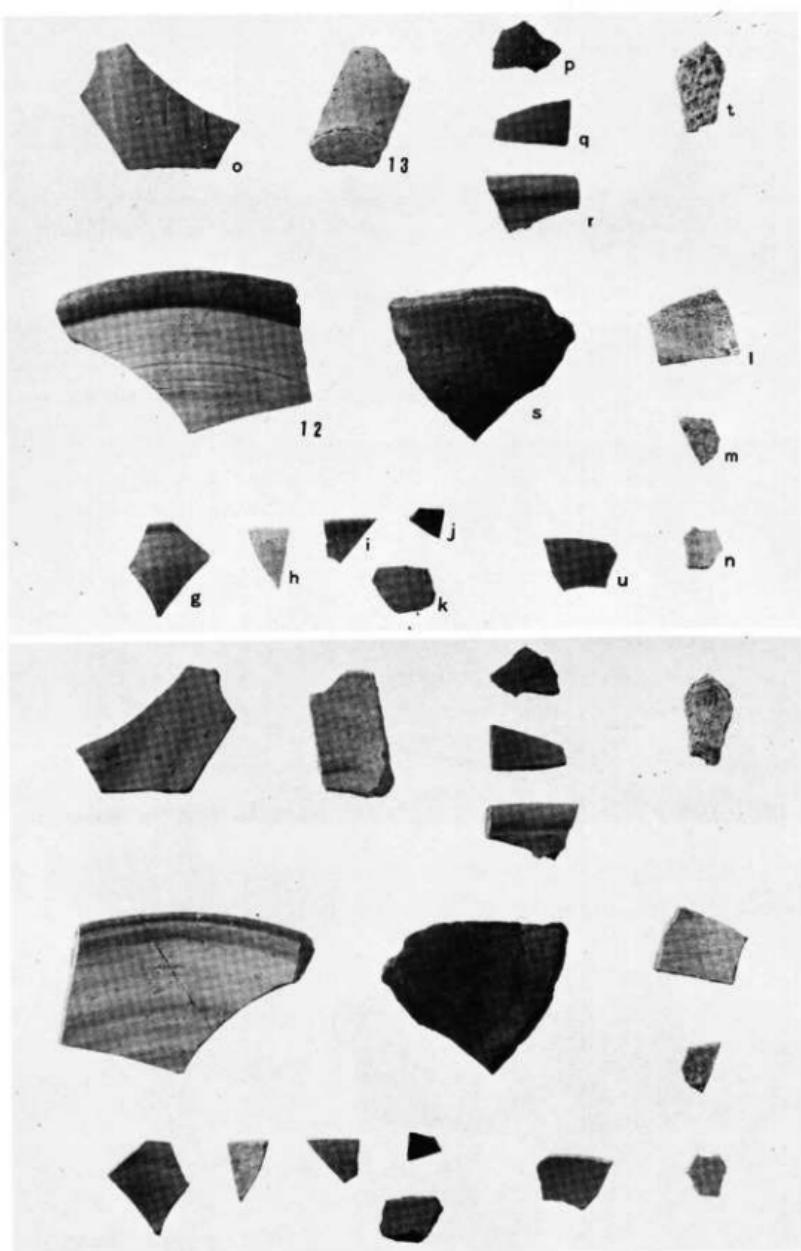


第2トレンチ（北より）



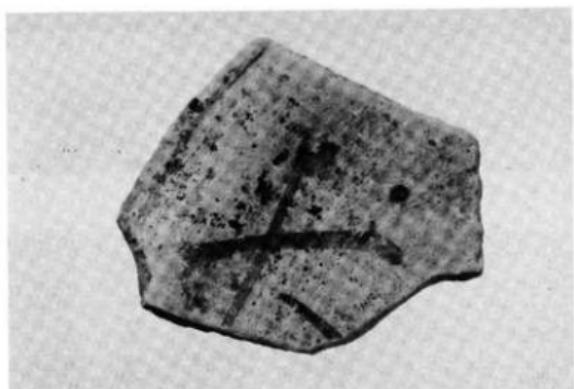
第3トレンチ（北より）



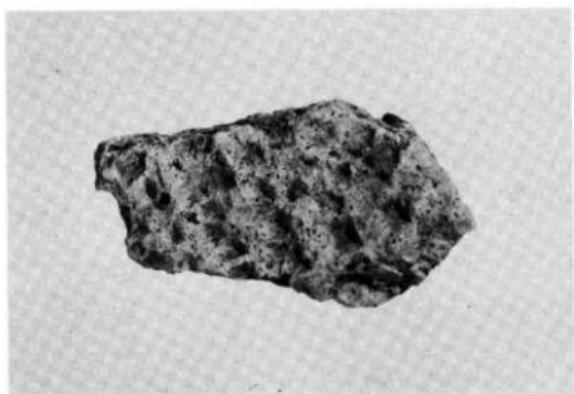




灰釉陶器 壺



土師器 盆（墨書）



須恵器 銚破片



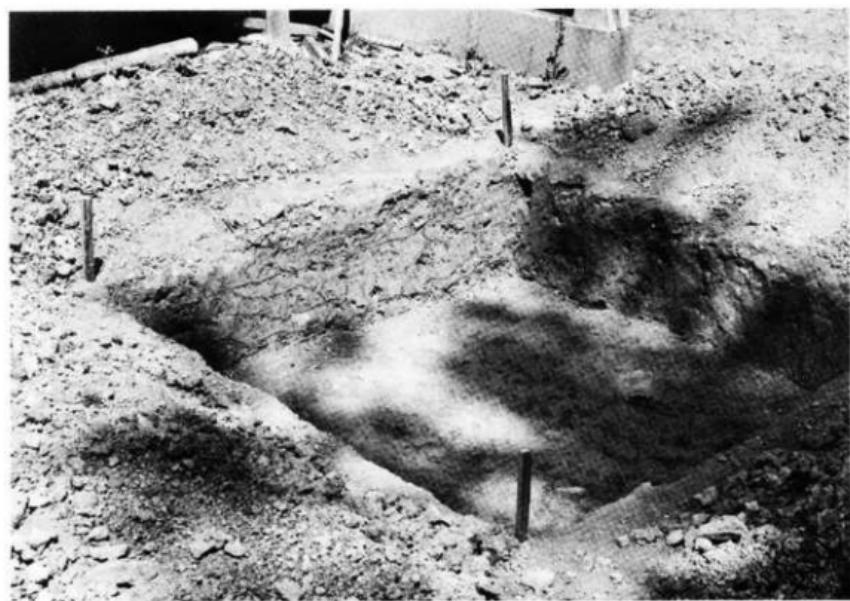
調査地全景（西より）



第5 トレンチ（南より）



第3トレンチ（南より）



第1トレンチ（南より）

延暦寺発掘調査報告書 I

昭和 55 年 3 月

編集 滋賀県教育委員会
発行 滋賀県教育委員会
助成 滋賀県文化財保護協会
印刷 富士出版印刷株式会社
